

和晒・注染

安土桃山の時代から始まった木綿の栽培を発端に、そこからできた綿布を手間ひまかけて不純物を取り除く「和晒(わざらし)」は、堺の地の利を生かして発展してきました。そこに「注染(ちゅうせん)」という技術と出会い、一つの伝統産業が生まれ育ってきたのです。

古墳時代(3世紀～)

麻や藤蔓(ふじづる)、楮(こうぞ)などを「晒(さら)し」てから糸を作り、機織りして衣類を作っていました。

奈良・平安時代(710年～)

現在でいうところの手拭いを表す「たなぐい」、同じくゆかたを表す「湯帷子(ゆかたびら)」という言葉が登場しました。「たなぐい」は神社・仏閣などの神聖な行事で使われる神器を拭いて清めるために、「ゆかたびら」は高貴な僧や貴族が体を清めるために「蒸し風呂」に入るときに身に付けたものと考えられています。

安土桃山時代(1573年～)

豊臣秀吉の時代、文禄～慶長時代(1590年代)に、三河の国、河内の国、和泉の国、摂津(現兵庫県を含む)で本格的な木綿(もめん)の栽培がはじまりました。



綿花の栽培は、日本の衣料に大きな変化をもたらしました

江戸時代(1603年～)

江戸時代初期には堺は全国有数の木綿および和晒の生産地になりました。踞尾(つくお、現在の津久野町)では寛永3年(1626)に田を木綿作りに切り替えていたとの記録や、元禄7年(1694)大鳥村の田畑の50%が木綿畑であった、との記録が残っています。

	高	低	計
本郷	204.489	2,218.03	
上	28.046	309.12	
中	274.175	1,435.11	
下	41.187	352.10	
計	347.893	4,314.36	
小	217.127	1,465.25	
大	130.766	2,849.11	
計	347.893	4,314.36	

元禄7年大鳥郡の存付け(堺市史)
資料提供: 協同組合オリセン

江戸時代中期には現在でいう観光案内書である「和泉名所図会」に石津さらしが紹介されています。石津川流域は海からならかな丘陵地になっていること、肥料である干鰯(ほしか)が容易に入手できたこと、熊野街道を通じて大阪、京、北陸路に流通が発達していたことから堺の石津さらしは広まりました。これにつれて堺は全国有数の木綿商いの中心地になっていきました。このような時代背景から、幕末には日本で初めての綿糸工場が薩摩藩により設立・操業されました。



石津さらし(和泉名所図会): 資料提供: 協同組合オリセン



近年の石津川の上流

明治前期

明治時代初期、和晒はまだ従来の製法であったため、大釜や石臼に一度に入る50反程度が製造単位で、およそひと月かけて仕上げられました。明治中期になると晒粉が普及し、釜のサイズも200反と大型化、製造期間も1週間に短縮されるようになりました。地域としては毛穴地区の生産量が大きく上がったのもこのころとされています。

明治中期

明治20年ごろ、大阪市内の紺屋でおしゃれなデザインの模様手拭を量産化する「注ぎこみ染め」が開発されました。現在でいう注染です。注染は当初手拭の量産を目的としていましたが、明治中期にゆかたの染色に応用されて注染ゆかたへの評価がたかまり、明治末期～大正初期にかけて大阪の注染工場数は飛躍的に増えました。



明治の時代に誕生した技が今も受け継がれています

大正

注染ゆかたは全国的に評判を取り、注染の染色法は東京を始め全国に広まりました。大阪の注染職人は、各地で講師を務めたり、場合によっては引き抜かれたりしたそうです。

昭和初期

戦災のため大阪市内は焼け野原となってしまいました。市内の注染工場の一部は、原材料である和晒と水(川)をもとめて、堺市内に工場を新設しました。これにより、堺市の毛穴・津久野地域は、和晒の製造から染色、整理(製品への仕上げ)まで、地域内で手拭い、ゆかた、寝間着などの製造を一貫して行える全国でも稀な地域となり、和晒、注染ともにそのシェアは日本一になっています。

現在

柔らかな和ざらしの風合いを生かした商品や、注染の技法を生かした手ぬぐいやゆかただけではなく、マスクやエコバックなど、伝統を生かしつつ現在のニーズに応じた製品が作りだされています。また、これらの伝統を繋げようと、事業者のなかには注染や絞り染め体験などを提供する工房も生まれています。



伝統に裏打ちされた風合いと華やかな色彩の浴衣
写真提供 協同組合オリセン